

キジも鳴かずば撃たれまい

表題は毎日新聞 4 月 10 日夕刊「語源由来紀行」。記事にある大願寺は、自宅に近い。抜粋して紹介したい。

「キジもやぶに隠れたままで鳴き声を立てなければ、そこにいることが分からず、射られるようなこともなかったろうに。なまじ鳴いたばかりに人に知られて射られるという意」（「日本のことわざ(二)続評釈」から）。

「キジも鳴かずば撃たれまい」。無用のことをしたり、言ったりしなければ、災いを招かずに済むのに。後悔しないように気をつけようよ。今の解釈はこんな感じか。軽い感覚で受け止めていたら、重たい由来があることを知った。人命に関わる話だったのだ。

大阪市淀川区の JR 東淀川駅からほど近い大願寺。縁起には「勅命によって長柄の人柱となった『巖氏 (いわじ)』の菩提を弔うために建立された」とある。飛び地になっている近くの境内地には巖氏を顕彰する大きな碑が。由来書きには淀川治水をめぐる悲話がつづられている。



巖氏は、千数百年前の垂水（現在の大阪府吹田市垂水町あたり）の長者。洪水が頻発した淀川の長柄の渡しに橋を架ける国を挙げた事業がうまくいかず、最後の手立てとして人を生きながらに橋の下に埋める「人柱」を入れて完成を祈るということに。人選が話し合われる中、巖氏は役人に進言した。「はかまに横つぎのあたっている者を人柱にすればよい」。はかまに横つぎをあてていたのは巖氏自身で、巖氏は人柱に選ばれた。

どうして、そんなことを。由来には「巖氏は日ごろの報恩の精神、すなわち慈悲の心を達するために、自ら『人柱』となる決意のもとに進言をした」と。この犠牲により、橋は無事に完成し、大水が出ても流されることはなかったそう。この話は朝廷に届き、長柄橋の守護と巖氏の冥福を祈るために人柱ゆかりの地に寺が建立された。

何とも痛ましいばかりだが、キジはどのように関わるのか。続いてつづられる巖氏の娘・照日をめぐる話に出てきた。照日は別の村に嫁いでいたが、父の悲劇のショックで物言わぬ人に。心まで閉ざしたことから、実家に帰すことになった。夫とともに長柄橋を通過し、垂水のあたりに差しかかった際、一羽のキジが鳴く声。夫はすかさず弓矢を取り、射止めた。この様子を見ていた照日が詠んだのがこの歌。「ものいわじ 父は長柄の橋柱 鳴かずばキジも 射られざらまし」

歌で妻の心を理解し、また、妻が口を開いたのを驚き、喜んだ夫。キジを手厚く葬り、来た道をとって返して河内に戻り、仲良く暮らしたという。

(2021 年 4 月 18 日)